

共同研究 ● 音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に（2011-2014）

## はじめに：本研究に至った経緯

本研究は、1945年以前に日本のレコード会社が台湾と上海で発売したレコードを取り上げ、同じ中国語系の両地域におけるレコード産業の実態と、各地域で発展をとげた音楽諸ジャンルとレコード産業の関連を探ることを主な目的とする。また可能な限り、同時期に台湾と同じく植民地となった「朝鮮」との比較研究も視野に入れる。研究タイトルに「音楽」ではなく「声」という概念を使用したのは、当時、東アジアに流通したレコードでは声や歌を含む音楽ジャンルが多くを占め、演説、映画説明、戯劇など、音楽に限定されない多様な音を収録したからである。なお本研究は、国立民族学博物館が所蔵する、1945年以前に日本コロムビアが発売したレコードを主たる研究対象とするが、他のレコード会社が発売したレコードも対象に含める予定である。

この共同研究の前段階は、日本コロムビアが第2次世界大戦以前（以下「戦前」）に台湾、上海、朝鮮など「外地」で発売したレコードについて、曲名と発売情報に基づきディスコグラフィを作成するプロジェクトであった。2003年から5年間継続し、ディスコグラフィ刊行という当初の目的を果たした。だがディスコグラフィの作成は研究の起点にすぎない。さらに「戦前」の各地域のレコード史を探るため、読み解かれるべきテキスト、つまりレコードの内容研究に着手すべきではないか、との意見が研究メンバーから出された。内容に踏み込んだ研究が進めば、当時の人々が享受した音楽ジャンルや、それらと現行の音楽ジャンルとの関連、音楽の

演奏方法や表現における変化の有無も明らかになる。さらに、日本のレコード産業をバックボーンとして、各地域に共通の経営手法があったのかなど、外地どうしの比較検討も研究の射程に入るだろう。

台湾、上海、韓国の3地域におけるレコード研究の現状を概観すると、韓国がレコードの収集と研究の両面で最先端に行く。また、上海のレコードに関心を寄せる研究者は、アジアのみならず欧米にも見受けられる。これに対して台湾は、戦後の政治的、社会的環境の変動に影響され、「戦前」の音声資料の保存に出遅れたため、現在台湾で収集できる「戦前」のSPレコードの量やジャンルは限られており、その全体像はいまだに掴みにくい。幸い、国立民族学博物館が所蔵するコロムビアレコードの音源資料には、当時の台湾で発売されたレコードがほとんど含まれるため、台湾のレコード研究にとっては、国立民族学博物館の所蔵資料の研究が一番の近道と考えられる。

ここで重要なのは、上掲3地域のレコード史が互いに無関係ではなく、日本を媒介として、あるいは日本ではなく別のルートを介して、なんらかの関わりを持った可能性を指摘できる点である。台湾のレコード研究も決して単一地域の研究に留まらない。台湾は、1895年の日清戦争における清の敗退とともに、下関条約によって日本初の植民地となった。植民地台湾に対する宗主国日本の影響は言語、教育、経済など多方面に及び、台湾のレコード史も、日本のレコード会社がレコードを台湾に輸出したことから始まる。日本の植民地と

なった台湾と中国大陆の間では、政治面は言うに及ばず、文化的交流も乏しかった印象を与えるが、その実、交流は盛んであった。たとえば1900年代には、上海の演劇団（京劇）の名優を台湾に招いて興行した記録がかなり残っており、大陸で流行する演目が台湾でも知られていたことが推測される。また、日本コロムビアも上海向けにレコードを発行したので、同じ漢字で意思疎通できる両地域の人々にとっては、歌や演目の共有は決して困難ではなかったはずである。こうした状況を理解した上で台湾と上海のディスコグラフィを見直せば、別の視点が芽生える可能性が高い。実際、上海と台湾の発売目録を確認したところ、共通の流行歌と演劇のレコードが発行されていたことがわかった。

以上の諸状況をふまえ、本研究は、主に台湾、上海、日本で発売されたレコードを比較し、各地域の音楽嗜好の傾向や共通点、独自性を明らかにし、更にそれらの関連性を見いだすことを目指す。これを通じて、



国立民族学博物館内にあるコロムビアの金属原盤収蔵庫。



金属原盤（国立民族学博物館提供）。



台湾で発売された3種類のレコードレーベル（林太蔵氏提供）。

レコード産業の発達と各地域の社会、文化、音楽の間の相互影響を検討し、あわせてレコードによって形成された新しい音楽ジャンルの足跡をたどりたいて考えている。

### 植民地台湾（1895-1945）のレコード事情

ここでは、研究の主眼の1つである「戦前」の台湾レコード事情について、少し説明を加えておきたい。台湾は50年に及ぶ植民地支配を通じて、たしかに言語、教育、経済など諸側面で日本が統制していた。その一方で日本の商人にとっては、全島人口の8割以上を占める漢民族は、レコード市場の有望な顧客であった。

日本コロムビアの前身である日本蓄音機商会は、1910年に台北に出張所を設置した。当初は邦楽など在台日本人向けのレコードを中心に輸入したが、1925年に栢野正次郎が台北出張所の代表に就任すると、経営方針を転換し、台湾の漢民族向けのレコード制作を手掛けた。1920年代から1939年までの制作枚数は、発売年が不詳のものを含めて1000枚を超える。

コロムビアは、台湾の顧客の消費能力を斟酌して3種類のレーベルを作った。すなわち、①最も高価なレーベル「Columbia」、1枚1円60銭、主な収録ジャンルは歌仔戯（グアアヒ、閩南語）、流行歌と新歌劇である。②1枚1円10銭で中程度の価格の赤リーガル、主なジャンルは歌仔戯、北管、南管、採茶（茶摘み）である。③1枚85銭で最も安価な黒リーガル、主な収録ジャンルは歌仔戯、北管、流行歌、採茶戯である。

上記の主要ジャンルでは南管が最も古く、唐の時代に遡りうる。また北管は200有余年の歴史があり、比較的古いジャンルである。採茶歌は客家人が茶摘みの作業中に歌い始めた労働歌で、400年の歴史を持つと言われる。だが注目すべきは、むしろ歴史の浅い流行歌や歌仔戯であろう。台湾における流行歌の歴史は、まさにレコードによって作られたものである。初期のレコードには「流行新曲」と書かれていたが、実際には「小曲」という伝統音楽の節に基づくものもあれば、日本の民謡（例：草津節）の旋律を借用したものもある。さらに「毛毛雨」のように、上海の流行歌をそのまま歌った例もある。時代が下るにつれて、徐々に台湾人自身による作詞作曲も増し、1932年から36年までの間に、50曲を超えるオリジナルの流行歌が発売された。その特徴は、作曲者と作詞者ともに台湾人、歌詞が閩南語（時には片言の日本語が混じっている）、短調、恋愛や当時流行した現象を描く内容が多い点である。

歌仔戯もヒットしたジャンルである。現在では一般的に台湾オペラと訳され、京劇やイタリアのオペラと同様に、歌唱、身振り、器楽伴奏を伴う総合舞台劇である。物語は中国の民間伝説に由来するものが多い。1演目すべてを収録するには

何枚ものレコードを要するが、にもかかわらず台湾人に愛された。1930年代に3レーベルが収録したジャンルの別をみると、台湾オペラが常にトップ3の座にあった。ちなみにここでは主要ジャンルのみを取り上げたが、コロムビアは台湾音楽を発売した10数年の間、実に30種類以上の音楽ジャンルをレコード化したのである。この膨大な生産の過程でどんな音楽が発展し、どんな音楽が消えていったのか。また1つの音楽ジャンルの盛衰の裏にいかなる事情が隠されていたのか。様々な課題が見えてくる。それは台湾に限らず、他地域も同様であろう。

### おわりに

この共同研究の「声の近代」は、録音技術の誕生と密接な関係を持つ。初期の録音技術は音声の記録と保存を中心としたが、人々はその技術をさらに活用し、演奏された音楽を蓄音機に吹き込んでレコードを作った。遂にはそのレコードが売り出され、大衆がそれを買うという商業活動へと発展した。こうした一連の出来事があったからこそ、この共同研究も約百年前に商業化されたレコードの内容を調査できるのである。百年前の人々が初めてレコードを聞いた驚きや感激は、様々な文献や記事に残されている。それは、同じレコードを百年後に耳にした私たちの反応と、実は似ているのかも知れない。百年前の人間にとっても現代人にとっても、SPレコードはともに未知の世界だからだ。この共同研究会を立ちあげてわずか4か月、まだまだ若い研究グループではあるが、これから3年の研究期間において様々なレコードを存分に聞き、その声を持つ近代の意味を探り続けたいものである。

### 【参考文献】

- 倉田喜弘 2006『日本レコード文化史』岩波現代文庫。
- 福岡正太編 2007「植民地主義と録音産業 日本コロムビア外地録音資料の研究」平成17年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書。
- 台湾省漢溪文化学会執行制作 2000『聽到台湾歴史的の声音』国立伝統芸術中心籌備処。
- 徐亜湘編 2001『台湾日日新報と台南新報戯曲資料選編』宇宙出版社。

### りゅう りんぎよく

四国学院大学文学部教授を経て、現在奈良教育大学教育学部准教授。専門は音楽教育史学、民族音楽学。著書に『植民地下の台湾における学校唱歌教育の成立と展開』（雄山閣 2005年）、論文に「ウオグ・ヤタウユガナ（高一生）の作品のルーツを探る——植民地台湾の音楽教育と先住民音楽の観点を通して」（『奈良教育大学紀要』60(1) 2011年）など。